

追悼文

坂巻哲也

京都大学

「食べ物だけはけちるな。」これは私が西田さんのもとでチンパンジー調査を始めたころに学んだ一つの教訓である。このことを西田さんが直接私に話されたのか、西田さんと一緒に過ごしている中で私が勝手にそう学びとったのか、よく覚えていない。しかし、どちらであれ、私はその後自らのフィールドを新しい地域へ広げていくにつれ、この教訓の重要性はますます増しつつあるように思う。フィールドで手に入れることができるご馳走、あるいはご馳走を手に入れようとする努力が、どんなに測り知れない喜びを私たちに与えてくれることか。そのことを西田さんは教えられたのだと思う。



西田さんを偲ぶ

松阪崇久

関西大学

癌であることを告げられたのは5年ほど前のことだったか。その時にも大変ショックを受けたのであったが、その後も勢いの衰えることなく研究に邁進される西田さんの姿には圧倒され続けた。休むことなく第一線で論文や著書を執筆され、マハレでの現地調査も続けられ、最後の最後まで現役の研究者として研究の道をひた走られた。そのような姿を見ていて、西田さんはこの勢いで病気にも打ち勝たれるのではないかなと思うようになっていたくらいだった。

学部生の時に受けた西田さんの「人類学」の講義は、大学で受けた中で僕が一番おもしろいと感じたものであった。西田さんの話はときどき大きく「脱線」をしたが、それがまたいつも興味深い内容だった。大学院に進学後は、何から何までお世話になった。調査隊の一員としてマハレに連れて行っていただき、学位論文のご指導もいただいた。大学院修了後には、(財)日本モンキーセンターでの研究員の職もご紹介いただいた。また、チンパンジーの文化的行動について共同研究をさせてもらったことや、

映像エソグラムの作成で協力させてもらったことを大変光栄なことと思っている。

西田さんとはマハレでも何度か一緒に過ごさせてもらった。森と一緒に歩いたこともある。初めてのマハレ滞在の時には、チンパンジーの行動をビデオで記録する西田さんの後を追いつつ、チンパンジーのことや観察の仕方を学んだ。カンシアナ・キャンプでその日に観察したことを話す時間はとても楽しいものだった。僕が観察したことを話すと、西田さんはいつも熱心に聞いてくださった。西田さんの豊富な観察経験から、類似の観察事例について教えてくださることもあった。「それは是非論文にすべきだ」と背中を押していただいたこともある。カンシアナでの夕食も忘れられない思い出である。タンガニイカ湖で捕れた「クーヘ」の刺身・りゅうきゅうや、すき焼き。西田さんは、ビールを少しでも冷やすために瓶に濡れたタオルを巻いて置いておくのを忘れなかった。魚のさばき方も西田さんから教わった。そのおかげで、マハレで寿司を楽しむこともできるようになった。食事の席では西田さんはいつもジョークを言って場を楽しい雰囲気にしてくださった。西田さんの笑顔が懐かしく、そして寂しく思い出される。

お葬式のお別れの際には、お花を西田さんの足元に入れさせてもらった。この足で森や山を歩き回り、数多くの貴重な発見を積み重ねてこられたのだということを想いながら。そして、きっとまたマハレの森を歩かれるのではないかと想像した。ひょっとすると今ごろ、トングウェの古い友人たちや、ントロギ、カメマンフ、チャウシク、マスディといったチンパンジーたちとの再会を楽しんでおられるかもしれないと思う。

追悼文

井上英治

京都大学

京都大学の学部生の頃、西田さんの人類学の授業を受講しました。授業で何度かマハレのチンパンジーの映像を見せて下さり、とても楽しそうにチンパンジーの話をしていただいていたのを覚えています。初めてお話したのは卒業研究の相談に伺ったときで、授業を受けていた私のことを覚えていて下さったことに驚きました。私が卒業研究でニホンザルを対象にDNAによる父子判定を行いたいと話すと、当時研究室ではDNAの実験ができる環境になかったため、霊長類の父子判定研究のパイオニアの1人である故竹中修教授(霊長類研究所)を紹介して下さいました。彼らのおかげで、私は現在行動データとDNAデータをもとに野生動物の研究を行なっています。

ニホンザルの父子判定の研究を終えた後、西田さんがマハレでのチンパンジーの研究に誘って下さいました。私はとくにアフリカでの研究に対する強い憧れはありませんでしたが、マハレで研究を行なうことを決めました。西田さんの誘いがなかったら、私がアフリカで研究することはなかったと思います。また、私が初めてマハレのチンパンジーを見た際も、西田さんと一緒にでした。西田さんは

次々とそこにいたチンパンジーの名前やチンパンジーの食べる植物について教えて下さりました。その姿はまるで自分の家族を紹介するようで、西田さんのマハレのチンパンジーに対する愛情を感じました。

数年前に今マハレで調査をしている学生の松本さんを西田さんに紹介したときのことも印象深く覚えております。西田さんは、チンパンジーの研究の魅力について熱く語り、自分自身も研究したいと思われているトピックのいくつかを紹介して下さいました。多くのことを成し遂げてなお研究に対する意欲を失っていないことに驚嘆しました。西田さんは尽きることのない興味深い研究への情熱をお持ちでした。西田さんがチンパンジーの研究について楽しそうに話す姿が今でも目に浮かびます。私も西田さんの研究への意欲を見習い、多くのアドバイスを胸に刻み、研究を続けて行こうと思います。

改めてご冥福をお祈りいたします。

西田さんとのタンザニアでのふたつの思い出

花村俊吉

京都大学

2005年10月15日、私は念願のマハレに向けてタンザニア・ダルエスサラームへ飛んだ。初の海外旅行で単身だったため、興奮と緊張で発熱。そうしたなか、マハレから帰る途中の西田さんと落ち合い、西田さんお気に入り「ニューアフリカホテル」にてご馳走をいただく。西田さん特有の軽快なテンポで、今回見てきたチンパンジーたちのドラマ仕立ての面白話がひたすら続き、別れを告げる頃には旅の緊張感もすっかり解消していた。

2006年7月31日、西田さんが再びマハレに到着する予定。私はすっかり現地にも慣れ、どっぷりとチンパンジー調査にのめり込んでいた。カンアナ・キャンプの地震で倒壊した私たちの調査小屋の再建もこの日に間に合うよう進め、西田さんとカソゲの森を歩くのを楽しみに待っていた。しかし、体調を崩され急遽来られなくなったとの連絡を、その翌日の朝に受け取る。今思えば、それが、この年の10月に発覚する癌の始まりだったのかもしれない。当時、M集団のチンパンジーたちは分散気味だったが、その二日ほど前から集合し始めた。ところが、31日を境に再び分散し始め、ほとんど観察できない日々が続くことになる。「チンパンジーたちはムゼー西田を出迎えるために集まったが、居なかったのがっかりして分散したのだ。」調査助手たちは、口々にそう言った。

急峻な観察路を駆け抜けて

稲葉あぐみ

(財)日本モンキーセンター

西田先生には、2001年にアルバイトに雇っていただいて以来10年間、ひとかたならぬお世話になりました。

2006年7月のウガンダ出張中に体調を崩され、10月に直腸癌が見つかりました。先生はその兆候を初期に見逃したことを大変悔いておられました。この年の6月には、マハレの花村さんから、病気流行によりチンパンジーが多数死亡したとの知らせが届いていました。「チャウシクが(ライオンに喰われて)いなくなったときは(僕は)まだ若かったが、今回のオパール、ミヤ、ピンキーの消失はショックでやる気をなくしてしまった」と沈めました。翌2007年8月にはマハレで一緒に過ごす恩恵に与りました。年末に手術されたとは思えないほどお元気で、急峻な観察路をチンパンジーたちと一緒に砂埃をあげながら駆け下り、私たちはあつという間に置いていかれました。ふもとで「(チンパンジーに)少しも遅れを取らなかった!」と誇らしげにおっしゃり、体力に自信を取り戻されたように見えました。ところが、翌年には病気が進行し、つらい抗ガン剤治療が始まりました。体調がよいときは仕事に没頭され、遺作となる“*Chimpanzees of the Lakeshore*”はMcGrew先生たちの献身的な協力も得て完成しました。原稿の最終チェックのため、入院先やご自宅へ頻りに伺いましたが、亡くなる2週間前に電話でお声を聞いたのが最後になってしまいました。西田先生、長い間本当にありがとうございました。



チンパンジーを待ちながら(2007年8月)

Pan Africa News, Vol. 18, 特別号 日本語版
2011年9月発行
住所: 〒606-8502
京都市左京区北白川追分町
京都大学理学研究科・動物学教室・
人類進化論研究室気付
TEL: 075-753-4093
FAX: 075-753-4115
E-mail: pan.editor@gmail.com
URL: <http://mahale.main.jp/PAN/>
ISSN: 1884-751X (Print), 1884-7528 (Online)